

さくらびと

野口雨情と「雨情しだれ」

ほそかわごころ
細川呉港（会員）

1. 詩人の晩年

「赤い靴」「シャボン玉」「七つの子」「證城寺の狸囃子」「青い目の人形」「雨降りお月さん」「兎のダンス」「黄金虫」「船頭小唄」「波浮の港」「あの町この町」などなど——これらの歌は、子どもの頃から聞きなれた馴染んだ曲で、それもあたる程度、歳を取るとよけいそれらの歌が、懐かしく、またその歌を歌った頃の自分を思い出して、せつなくも悲しい思いにさせられることがある。

日頃これらの詩を書いた人などあまり気にしたことがなかったが、これらはみんな野口雨情の作詞である。子ども心に立ち返って純真な気持ちで、こうした詩を書ける人はすごいと改めて思う。

野口雨情は明治十五年（一八八二年）茨城県の磯原というところで生まれた。

福島に近い茨城県の東北の海岸線にある漁師町である。生まれた家は江戸時代からの名家で、水戸の藩主光圀公もやって来て、海の眺めがいいことから「観海亭」と名づけたという。

雨情家は、幕末明治には、回船問屋をやっていたが、次第に没落。それでも土地や山もたくさん持っていたらしい。雨情は東京に出て、のちの早稲田大学、東京専門学校に入り、坪内逍遙に学ぶ。いろいろな雑誌に詩を発表するが1年半で退学をしてしまう。

父親は村長をしていたが、食道がんのため他界。雨情は家督を相続し、その年、第一詩集『枯草』を出版するが、母親は雨情を「家」の存続のために、栃木県の分限者（お金持ち）の娘と強引に結婚させるのである。雨情はやむなく結婚し、やがて子どもも生まれるが、根っからの放浪癖のため、たびたび家を飛び出した。

その後雨情は詩集『朝花夜花』を二編出版。これは雨情のその後の作風を決定づけた口語による定型詩運動ともいえるべきものであった。さらに詩を各誌に発表しながら、報知新聞の特派員の資格で樺太に行く。帰京後、小川未明、相馬御風、三木露風などと知り合い、坪内逍遙の紹介で今度は『小樽新報』の創刊にかかわり北海道へ。このとき石川啄木と机を並べるが、雨情はすぐに編集長と折りあいが悪く退社。そのあと北海道の新聞社を転々と替わることになる。いずれにしても同じところに長いこと勤められず、いったんは磯原に帰郷し、やがて再び上京して新宿区の若松町に住んだ。二十七歳であった。

雑誌グラフィック社で編集をするかたわら『明星』を発行し、一度は家族と母を呼び寄せるがすぐに、母親が死亡。明治四十四年、再び磯原に帰り、一応家業をついで山林の管理や畑仕事をする。しかし三年後、離婚。その後、福島、北海道、再び福島から水戸へ転々と。福島では芸妓屋の女将と一緒にになり、ふたりの子どもを託したこともあった。従兄妹を頼って炭鉱の事務所働いたことも。磯原は炭鉱の町でもあった。

大正七年水戸で作詞家という仕事に理解のある中里つると結婚。この頃から仕



野口雨情

年一九二四年、
四十二歳)、
そしてその後
二十年近く住
むことになる
武蔵野村、吉
祥寺に移転す

事をしながら童謡を書き始める。「枯れすすき」、のちの「船頭小唄」の詩に中山晋平が作曲。以後中山晋平とのコンビが続くことになる。

『金の船』の編集部に勤務のため再び上京。多くの作品を発表する。大正十年に「船頭小唄」の楽譜が発売される。以後「十五夜お月さん」「七つの子」「かなりや」「青い眼の人形」「赤い靴」などを次々に発表。巣鴨に転居。

作詞がヒットすることにより、この頃から、転職、変転を繰り返した雨情の人生が、落ち着いてきた。その後の経歴は一般的によく知られているとおりである。雨情は名実ともに作詞家として世の中に認められ、レコードも次々にヒット。講演旅行も頼まれるようになった。さまざまな雑誌に多くの作品を発表、また童謡などの選者にもなった。雑誌『金の船』の選者にもなる。朝鮮を旅行(大正十三

る(現在「童心居」として一部書齋が井の頭公園に移築保存されている)。昭和元年、佐々木信綱、北原白秋らと日本作家協会を設立。昭和二年台湾を旅行。昭和五年浜田広介、藤井清水らと日本歌謡協会を設立。(藤井清水は私の故郷広島県呉市の出身で、雨情と仲が良かった。実家は今でも残っている)。
そして昭和十六年太平洋戦争開戦である。

雨情は早くから戦争の結末を心配していたのか、住み慣れた吉祥寺を売り払って、田舎への疎開を考えていたらしい。妻つるも賛成。栃木県宇都宮の郊外、鶴田というところの農家を、畑ごと買い取る話を進めていた。一町(三千坪)のイチゴと柿の果樹園、それに二反歩ほどの畑と、築二十年の農家である。農地転用や郷里磯原の戸籍の問題などいろいろあって実際に移ったのは昭和十九年(一九四四年)の一月だった。敗戦の前の年である。もともとその土地で柿の果樹園をやっていた農家が、経営がなかなかうまくいかず売りに出していたらしい。イチゴの栽培は、戦前では珍しかった観光摘み取り農園だったという。しかし、年によっては五月に入っても霜が降りたりしてイチ

ゴがダメになったこともあったらしい。家は羽黒神社がある小山の麓で、北側はすぐ山になっている。周りは広い畑だった。

この頃の読売新聞の栃木版を見ると、雨情一家が地元を越して来たことが微に入り細に入り何度も記事になっている。今では考えられないことだが、こんなことまで書いていいのかと思われるくらい。「疎開」は農村地帯にとっては大きなニュースだったことがわかる。新聞記事によると、

——野口雨情氏が吉祥寺の七八七番地から、宇都宮の姿川村鶴田一七四四番地に引っ越して来た。雨情氏は少し前に脳溢血を患い、身体が少し不自由になっている。子どもは、上の子喜穂子さん(十九歳)は武蔵野高女に通っていて東京に残ったが、妻のつる(四十四歳)が十三歳の存弥君、陽さん(十一歳)、喜代子さん(九歳)、美穂子さん(七歳)を連れてきた——と書いてあるが『野口雨情の生涯』長久保片雲著によると、雨情とつるさんとの間の子は、結婚している長女香穂子(当時二十五歳)、東京に残った千穂子(十九歳)、以下宇都宮に連れてきたのは美穂子(十七歳)、存弥(十三歳)、陽代(十一歳)、喜代子(九歳)、

恵代（五歳）と思われる。

さらに新聞には、一家は仮住いではなく、永久的に農業をするつもりでやって来たことが細かく書いてある。今では、すぐにプライベート保護とかといって、書けないことが多いが、当時は個人的なことでもなんでも書いてある。そして近所の「隣組」の人たちが、とても親切で、荷物や家財道具の荷解き、運搬、そして家の掃除までしてくれたことが強調してある。

疎開してきた都会の人たちや子どもたちが、田舎の付き合いの中で、差別されたり、疎んじられることがないよう新聞で誘導しているのだ。昭和十九年一月二十一日の記事のタイトルは「温（か）い人々の抱擁・疎開は愉し 土に帰る詩人一家」となっている。記事には大きな写真がついていて、存弥君が学校で相撲を取っているもの。田舎の子どもたちとすでに仲良く学校生活を送っているという写真だ。ご存じのように、このころ一般に都会の子が、疎開先の知らない田舎で地元の子どもたちに苛められたというのをよく聞いたものだが、仲良くするようにこのような記事を強調して書いたのであろう。

また次の週には、「身にしむ人の親切―果樹園に春を待つ」と題して疎開後の雨情一家の様子と写真が載っている。雨情

が愛嬢千穂子さんと縁側で並んだ写真。近所の子どもも来ている。雨情は着流しの着物を着て娘とともに正座している。

そして何より、詩人野口雨情が、吉祥寺でのこれまでの作詞生活を投げ打って、宇都宮に農民になる決意のもとにやって来たこと。一町ほどの果樹園は、今までそこにいた農民が、イチゴの栽培と、柿の実を採っていたこと。そして残りの二反の畑で野菜を作ること。吉祥寺の家は、印刷会社を買ったこと。

出発の吉祥寺では、三人の人夫が五日かかって二〇〇個もの荷造りをしたらしい。雨情は改めてこんなにも荷物があつたのかと、またこれだけのものが疎開先で必要なかと驚いたという。梱包費と鉄道運賃で、全部で六三〇円かった。

吉祥寺出発前は、荷物を送ったあと何日か、嫁いでいる長女のところに世話になり、宇都宮に行つてから引越す荷物が届くまで何日かの食糧に困るからと、娘に米を三升と味噌、醬油を借りてきたという。しかし鶴田に着いてからは、配給がすぐに受けられ、心配はなかったとわざわざ書いてある。しかし、マッチを持ってこなかったために、煮炊きの火を起すのに困ったことなど、これから疎開をする人のために注意というか、参考

になることもこまごまと知らせている。そして再び、近所の農家の人たちがいろいろと助けてくれてありがたいと雨情氏がお礼を述べている。お互いに助け合う「隣組」だ。また近く長男の存弥君は市立西国民学校に転入することも書いてある。いずれにしても、六十二歳の雨情が決心したことは、あくまで農民になり、自給自足もいとわぬという決心である。

同じような疎開人を私は前に書いたことがある。戦前東京で、安達流生け花（插花）で一世を風靡した安達潮花である。娘はのちにマスコミでもたびたび登場する安達瞳子である。安達潮花は疎開とともに、もともとの出身である広島県呉市安浦町の浄念寺に帰り、本格的に、近所の田畑を買い取り、近隣の人たちを集めて「集団農業」を始めた。それまでの都会での生け花の学校などをすべてやめたのである。潮花は農民になりきった。のちに多くの東京にいたかつての弟子たちに促されて、数年後にやっと帰京したが、戦後、他の流派がいち早く進駐軍の高級将校の婦人たちを取り込んで宣伝したのに比べ後れをとった。そのために安達流生け花の家元としての東京復帰がなかなか思うように進まなかったのである。「桜人」桜

と椿の物語―安達潮花と瞳子、親子」（未発表）。戦争中の疎開、帰農もいろいろなパターンがある。

新聞はまた、二か月後に（三月二十七日）、野口雨情家について報じている。今度は年長の存弥君が中学校に合格したという速報である。題して「お友達早くおいで、目方も増えた、野口君は中学へ合格」という記事である。

――存弥君が（東京の）武蔵野第四国民学校から、宇都宮市立西国民学校へ転校してから二か月あまり。血色も目立ってよくなり、体重は一キロあまり増えた。転校時は鉄棒も、ぶら下がるのがやっとだったが、宇都宮中学の体力検査では、足掛け上がりなど楽々とやってのけ、ついに入学の栄冠を勝ち得たのであった――と。

そのほか新聞には、各県の疎開に来た人たちの動向が書かれていて、有名な名士や軍人のお偉いさん、歌舞伎の名優などが、紹介してある。

「家、食料も万全、畑まで用意、疎開に高まる地方の戦友愛」と題して、栃木、群馬、茨城、千葉、埼玉など各県の状況が述べてあり、栃木県は雨情のほかに、歌舞伎の市川猿之助、文壇の山本有三が一家を挙げてくることになっているとい

う。それぞれの県が受け入れ態勢を整えているという話だ。

その後、栃木県に疎開した人は二万八千名に及んだが、疎開人にもまた国を挙げての増産の戦列につかなければならないと、野口雨情を隊長に、山本有三、大木敦夫などを幹部に、全国に先駆けて、「疎開者勤労挺身隊」を結成、勤労奉仕のほかに、文化の面からも農村と工場に「出勤」することになったと報じられている。

栃木県は県を挙げて勤労奉仕、戦意高揚に取り組んでいるのである。それを煽るのが新聞と、そして「世間」であった。

脳溢血を経験し、足が不自由だった雨情。都会の生活を投げ打って自然の中で「帰農」を目指してやって来た雨情は、こうした世の中をどのように見ていたのであろうか。五人の子どもを抱えて、妻つるは畑を耕し、足の不自由な雨情は縁側でボーッとしていたこともあったという。

しかし、昭和十九年の一月末に宇都宮の鶴田に引っ越して来た雨情は、そうした決戦体制の中から、ちょうど一年目、翌二十年一月二十七日に亡くなっている。敗戦の七か月前であった。六十二歳であった。

空の真上の お天道さまよ

宿世来世を 教えておくれ

今日は現世で 昨日は宿世

明日は来世か お天道さまよ

遠い未来は 語るな言ふな

明日という日を わしや知らぬ

昨日暮らして 今日あるからにや

明日という日がないぢやない

空の真上の お天道さまよ――

死後、ノートに書かれていた遺稿である。未完であったかもしれない。雨情は「銃後」の騒がしい世の中で、ひとり自分の死を見つめていたのかもしれない。

雨情の葬式は随分寂しかったという。まだその頃は人家もまばらな農村地帯。十八戸の「隣組」の人たちが何人か集まって葬儀は行われた。八月の敗戦間近、食料もモノ不足も一番底をついたときで、疎開して来たときはあれほど新聞で騒いだのに、皆が自分の生活でそれぞれで、はなかった。

家から鹿沼街道を東に行ったところに塩釜神社があり、その宮司が呼ばれ、自宅で神式の葬儀が簡素に行われた。その後「隣組」の誰かが、どこからかやつと探して借りてきた小さな荷車に、棺桶は乗せられた。そのとき、棺桶の蓋を開

じるための釘がなかった。それで縄で縛ったという。その上から、羽織がかけられた。つる夫人は、着物を着たままやはり「隣組」の若い人の自転車の後ろに乗って、荷車のあとをゆっくりと畑中の道を戸祭町の火葬場まで運ばれていった。自転車の空気がほとんどなく、パンクするのではないかと心配したという。当時はまだほとんどの家が土葬だったが、雨情だけは火葬にした。このとき、近くの今泉町の興禅寺の住職、石川暮人が、僧衣ではなく国民服にゲートルを巻き、その上防空頭巾をかぶってお経を読んだという。石川暮人は若山牧水の門下であり、歌人としても有名で、雨情との付き合いもあり、雨情の書や軸をたくさん持っていたという。

雨情は実に多くの人にたくさんの思い出を残している。一九七三年に金の星社から出された『みんなで書いた野口雨情伝』を読むと、多くのエピソードと、そして誰にも愛されたその人柄がよくわかる。

本場の絶筆は

「今日も畑で わしゃひとり」
だと、書いている人もいる。

また前出の『野口雨情の生涯』によると、ある日座敷で休んでいる雨情のために、つる夫人が羽織を着せかけようとす

ると、

「死んで行くのに羽織などいら無い」と断ったというエピソードも。

多くの想い出を周囲の人に残した人である。

2. 「雨情しだれ」の発見

四年ほど前のことである。毎年、全国の桜の名所を回りながら行われている「桜シンポジウム」のときだった。東北の二本松か、あるいは翌年の越前の高田でシンポジウムが行われたときであつたらう。毎回、夜のパーティーでは参加者全員が集まって親睦会が行われる。大きな会場で、地元のお国自慢のさまざまな出し物やコンサート、特産の名物料理などがふるまわれるが、その騒がしい中で、たまたま名刺交換をした人が東京の桜のグループの人で、「東京多摩日本花の会」「くにたち桜守の会」を率いて団体で参加したリーダーのひとり中原修さんだった。

わずか一分にも満たない名刺交換だったが、彼の言った言葉を私はずっと忘れなかった。「国立の私の家の自宅横の空き地（本当は車の通らない通路だが）に、『雨情しだれ』を植えているんですよ」と。しかもその横のJR中央線にそった

道にも雨情しだれを八本ほど、都合十本植えていて、まだ公式には認められていないが、その道を『雨情通り』と呼んでいるのだという。

その中原さんに会ってから三年目の二〇二一年、私はやっと念願の「雨情しだれ」を、コロナ禍の中、非常事態宣言の前に見に行くことができた。昨年はコロナ禍で全く桜見学ができなかったからである。今年こそはという思いだった。彼は私のことを全く忘れていたが、そこは同じ「桜屋」、すぐにぜひ見にいらいっしょいと大歓迎だった。

自宅横の通路にある「雨情しだれ」は二本、しっかりと間隔をあけて植えられている。高さは五メートル、まだ植えて五年というだけに白っぽい幹は直径九センチから十一センチほど。しかし目の前に垂れ下がった花は見事だった。つぼみと白い花びらの外側はピンク、しかも八重の花びらも大きく、まるで造花のように立派である。これは鑑賞用としても十分に堪える桜だ。自宅の庭には、「旭山桜」が鉢から地面に降ろして二メートルほどに成長して、これも今を盛りとたくさんの花を付けていた。きれいだっ

「雨情しだれ」は実生の「八重紅しだれ」から、または八重紅しだれが、突然



「雨情しだれ」の花

変異による「枝替わり」でできた品種ではないかという。目の前に垂れ下がる花をたくさんつけた枝に対して、幹の上のほうから新しく出たしだれる枝が、左右に自由に伸びている。

「いやあ、枝が暴れるんですよ」と中原さん。その都度誘導しなければならぬらしい。それにしてもは目の前に垂れ下がっている花は見事だ。

横の通りの「雨情通り」の桜も立派だった。これらが大きくなるとどうなるか楽しみでもある。

しかし、いったいこの桜は、なんで「雨情しだれ」と言うのか。雨情との関係は？私が前から疑問に思っていることだ。雨情の桜の歌も私は聞いたことがない。

しかし、のちに旧知の「秩父雨情会」の会長武内優さん（東文研会員、88歳）

によると、雨情が作品に取り上げた植物の中では、桜が一番多いのだという。武内さんは『定本・野口雨情』の本の一卷から五巻までをすべて渉猟し、植物名をリストアップ、数を数えた。それによると、「桜」は百九十九か所、次に多いのが「花」で百六十五か所、続いて「松」百五十四か所、「藪」が六十一か所、「梅」が三十九か所、「柳」が二十八か所などで、圧倒的に桜と花が多いのだ。

中原修さんが言うには、この木はもととは宇都宮の鶴田というところの雨情の旧宅にあったのだという。それを「日本花の会」の結城農場で接木、育成した。例の、雨情が敗戦の前の年、吉祥寺の自宅を引き払って、引っ越した「帰農居」である。それだけしかわからなかった。そこで、いろいろ聞き取りをしていくと――。

「雨情しだれ」を「最初に発見」したのは日光植物園（正式には東京大学大学院理学系研究科付属植物園。都内の小石川植物園の分園である。小石川植物園は徳川綱吉の葉草園がもとで、分園の日光植物園は明治三十五年にできた）にいた主任の久保

田秀夫である。

久保田秀夫（故人）は、もともと長野県塩尻の片丘国民学校（戦後は片丘小学校）の教員で、植物が好きだった。山梨の県境でリンドウの新種も二種発見している。

久保田はまた桜では有名な人で、主に原種の研究と育成をした人。それまでに「発見」した桜は、教員時代に見つけた「片丘桜」、のちに移った栃木県の小山の修道院で十月桜の実生の中から、変わり種を見つけた「思川」である。十枚の花弁をもつ美思川桜は今では小山市の花として、市内各地に植えられている。東京の神代植物園にも一本あり私も何度も見たことがある。

その久保田が発見した片丘桜にはよく知られている有名な逸話がある。ちょっと横道にそれるが紹介すると――。

久保田が、あるとき庫裏平（長野県塩尻）の学校の学有林で高さ五十センチほどの小さな桜を発見。小さいながらも花をたくさん付けていた。桜はふつう四、五年して四メートル以上にならないと花は咲かない。それなのに小さいまま、たくさん花が咲いていた（早く咲き始める桜は牧野富太郎が高知県佐川で見つけた「稚木の桜」がある。発芽後三年もしな

いで開花する)。

花びらはやや細く星形、桜は普通開花後赤化するが、この桜は咲き始めの白から、極端に花全体が赤くなるまるで別の桜のよう。

周りにはカスミ桜の大きな木がたくさんあるから、その影響で(混血して)新しい桜ができたのかもしれない――。

戦後、久保田は塩尻から松本に異動。このときその新種かもしれない桜を、鉢植えにして松本へ持って行った。その頃待望の長男が生まれた。長男も植物が好きで、幼いときから桜の絵をたくさん描き、あるときはクレヨンでサクラの根の周りに埋めて、いろいろな色の花を咲かせようとしたこともあったらしい。新しい桜の申し子だと久保田は思った。久保田は間もなく、日光の植物園から誘いがあり教員をやめ、研究員として転職。息子の可愛がった桜も一緒に持って行ったが、長男はまもなくはよりの疫病にかかり六歳前に急逝してしまった。久保田の悲しみは尋常ではなかった。

それから三年目に、桜はカスミ桜から派生した新種として認定された。国立科学博物館の大井次三郎が命名した。それが片丘桜。学名は *Prunus verecunda* f. *Moriol*。ノリオイとこうのは幼くして死

んだ久保田の長男の名前・詔夫^{のりお}から名づけられた。恩師大井次三郎の久保田への思いやりだった。塩尻の学有林で久保田が発見してから九年目のことだった。

原生地塩尻の庫裏平は、その後一九六〇年に山火事となり、何本か残っていた片丘桜はすべて焼失したが、ずいぶん後になって久保田が日光植物園に持って行った一本があることがわかり、絶滅は免れた。一九九一年には久保田先生の塩尻の教え子たちが保存会を作り、挿し木をして増やしている。今塩尻の市庁舎には片丘桜が三本植えてあり、高ぼっち(元の学有林)には片丘桜の碑が建ち、周りに片丘桜が植えられている。

さて、宇都宮、鶴田町の野口雨情の旧家の現在の持ち主、稲毛登志一さんの記憶によると、確か昭和五十五年頃、日光植物園の久保田先生が桜を見にやって来て、これは「新しい桜」かもしれないと言った。先生はまた次の年もやって来て、今度は桜の枝をいくつか持って帰ったのだという。

実は、野口夫人つるさんから土地と家屋を買ったのは、稲毛登志一さんの

お父さんで、昭和三十一年(一九五六年)のことであった。

つる夫人は夫・野口雨情に死なれたあとも、鶴田に残った。

戦後も五人の子どもと、二人の親戚の人と八人暮らしで、畑を耕して文字どおり自給自足の生活をしたが、十一年後、ついに土地と家のすべてを売って、再び東京の吉祥寺に帰って行ったという。夫に死なれ、たくさんの子どもを抱えて、女ひとりで敗戦後の暮らしは並大抵の苦労ではなかったと思われる。野口雨情の伝記や思い出の書はたくさんあるが、このつる夫人についてはあまり書かれていない。あるいは雨情以上に、一人の女として、波乱と辛苦の人生を送ったのであろう。雨情と同棲してからも籍が入るまで十七年もかかっている。雨情の実家の戸籍の問題もあった。

「土地の値段は相場場で変えられないにしても、家だけは、雨情が住んでいたというところで、できるだけ高く買ってくれ」と稲毛さんの父親に頼んだのだという。つるは吉祥寺では、元住んでいた家の、今度は駅の反対側に中古の家を買った。

その後、つるが死んだあとも、長男の存弥が死ぬまでそこにずっと住んでいたという。

野口雨情の家を買った稲毛登志一さんの父親は、戦前は東京で証券会社に勤めたこともあり、宇都宮に帰ってから、早くから雨情の旧家の価値を認めていた人ではないかと思う。敗戦後、日本が復興していく中で、三菱重工のトラックや重機の販売の代理店をしていて、景気が良かったという。その頃とはいえ、なかなか一町歩の土地と家を買えるものではない。その後三菱重工が二つに分かれ、重機の三菱キャタピラーと、一般の乗用車を売る二つの会社に分かれたとき、代理店契約を打ち切られたという。

栃木県立博物館に残る久保田秀夫の桜の採集記録によると、昭和五十四年（一九七九年）四月二十八日に初めて宇都宮の野口雨情の旧家によって来て雨情しだれを見ている。しかも同じ年の九月二十九日にも再びやって来た。採集地は宇都宮鶴田嵯峨野ホテルとなっている（日光植物園の清水淳子先生の調べによる）。これは稲毛登志一さんに確認すると、父親がそれまで、同じ敷地内で旅館をやっていたと。その名前が嵯峨野ホテルだったという。実際には旅館は二年前にすでに廃業していたらしい。

息子の稲毛登志一さんが同じ敷地内で、

新たにお菓子屋を始めたのが昭和五十五年八月なので、五十四年に久保田秀夫先生が来たときは、まだ父が元気で、父親が先生に対応したのだろうということだった。

久保田秀夫の三回目の訪問は、昭和五十五年（一九八〇年）九月十二日。四回目は昭和五十六年四月十九日である。今度は採集地は鶴田町とだけ書いてある。この二回の訪問は息子の稲毛登志一さんが会っている。とにかくまじめな先生だった。

野口雨情の旧宅は、もともと羽黒山（神社がある）の麓の畑に囲まれたところにあり、後ろは屋敷森に囲まれて風情のある農家だった。それが鹿沼街道の都合二回もの道路の拡張にあい、二回とも家を移動したのだと言う。家を持ち上げて、ウインチで引っ張り移動した。今では道路沿いにあり、後ろは神社のある山だが、前は今では店ごと貸している菓子屋の広い駐車場で、木々と畑に囲まれた昔の家の雰囲気は失われている。

雨情しだれが、いつから雨情邸に在ったかはわからない。稲毛登志一さんの記憶によると、おそらく雨情がここに引っ越して来たとき、近所の農家の人々が、桜の木も数本持って来たか、あるいはもとか

らあったのかもしれない。それは「八重紅しだれ」だったが、そのうちの一本が、今までとは違った蕾は濃いピンク、開花するに従って白くなる大ぶりの花を咲かせたのだという。今までにない見事なしだれで、南に面した雨情邸に向かって、右側。それも少し手前に植えられていた桜だという。これが初代の「雨情しだれ」の原木だった。

その頃に撮った写真を見せていただきたい。宇都宮雨情会編『石に刻んだ雨情の心 野口雨情詩碑集』という冊子の表紙になっている。カラー写真だが記録はそれしかない。確かに垂れ下がった今の雨情しだれ（国立の中原宅）と同じ花が咲いている。この桜が原木で、その枝を久保田秀夫が持ち帰ったのだが、その後、道路拡張で家を移動したとき、桜も家に向かって右側横に移したが、これが枯れてしまったのだという。原木はもうない。しかし、幸いなことに、久保田先生がすでに持ち帰っていて、雨情しだれはなくならないですんだ。

久保田先生は、持ち帰った雨情しだれの枝を、日光植物園で挿し木か差し芽をして育て、その後、その苗木を持って、稲毛登志一さんのところに来た。かなりたくさん挿し木をしたが、そのうち五六本しか着かなかったという。その貴重



3代目「雨情しだれ」

な一本を元の古巢の宇都宮の旧雨情宅に持って来たのだ。これが二代目である。しかし残念なことにこの桜も間もなく枯れてしまった。したがって現在の家の左手横にある「雨情しだれ」は三代目である。十二年ほど前に植えたもの。茨城県の「日本花の会」の結城農場から来た。

稲毛さんによると、この桜は他の庭桜と同じように体質が弱く、現地言葉で「ほろし」という黄色と黒の縞模様の毛虫がたくさんついたり、また病気になるたりするのだと。出入りの植木屋もいろいろな肥料を混合してやったりして苦労しているとも。

三代目の桜は、二〇二一年四月二十日、すでに葉桜だったが、青々として葉もよく茂り、元氣そうだった。十二年前に植えたもので、高さは一度切り詰めたので

四メートルほど、幹の太さは二十センチあった。何とか無事に大きくなってほしいものだ。

「だんだん、年ごとに花が咲くのと同時に葉が早く出てくるようになり、これは山桜に雨情桜を接木したからではないか」と稲毛さんは言う。台木の性格が継がれた桜に出るのだと――。

久保田秀夫はその後「雨情しだれ」を、日本花の会の結城農場に持ち込み、そこで大量に差し芽をした。結城農場には田中秀明場長という接木、差し芽の名人がいて、素晴らしいスピードと手つきでナイフを使い、たくさん接木、差し芽をする。今では雨情桜はすぐに注文に応じるほど苗木があるらしい（一年物だと百本位はある）。

地面に着くほどの垂れ下がった枝は花付きもよく、密生し、造花かと思えるほど見事な花だ。花びらは四十五枚から五十枚。花は平開し、萼頭は皿状である。ただし、課題は「暴れる」枝である。幹の上のほうの新しい枝は、とにかく弦のように自由に、右に左に伸びる。この枝を、うまく誘導しなければならぬ。逆に考えれば、誘導の仕方によっては、新しい雨情しだれの樹形が創造できるともいえる。とにかくまだまだ未知の桜であ

る。これからが楽しみ。この桜を今後、世間がどう評価するかが見ものである。結城農場の場長田中秀明さんに言わせれば「万葉の時代から続く日本の桜の歴史の中で、十九世紀に誕生した染井吉野はさしずめ本墨打、何しろ日本中の桜の八割が染井吉野だから。続いて今、全国的に広がっている早咲きの河津桜は二墨打だ」と。それに続く桜はいったい何であろうか――。

今年（二〇二二年）東洋文化研究会の春の桜ツアーは、国立の中原修邸に雨情しだれを見に行った。ちょうど花も満開で、やっぱり華やかで美しい。ところがそのあと、雨情しだれを最初に発見したのは日光植物園の久保田秀夫だが、「雨情の生家から新種かもしれないと、見たことのない桜の枝を採って久保田先生に送ったのは私だ」と言う人が現れた。子どもの頃から生家の近くに住む県立宇都宮中央女子高校の高松祐一という先生。2万坪の校庭に二十年以上かけて一時は百種以上百五十本の桜を集めた全国でも有名な「桜校長」である。またそのあと、筆者は、茨城県磯原の雨情生家に行き、孫の野口不二子さんに会った。こちらも意外な話が――。これらのことはまた機会があればお話しすることにする。